

菩薩を生きる

Bodhisattvacarya-vata-ra

入菩薩行論

【著】シャーンティデーヴァ 【訳】寺西 のぶ子 【監修】長澤 廣青

プロローグ

二〇〇九年一月二日夜、ネパールのとあるホテルの一室で私は息も絶え絶えの状態であった。長時間の旅の疲れもあったし、なにより三千呎近くある高地のホテルまで車で一気に向かったのも災いしたのか高山病に近い症状が出たのかもしれない。

寒さと息苦しさに身もだえしながらもいっこうに眠れない。二日後には待ちに待ったサキャ・トリチェン・リンポチェとの面会が予定されているというのに。だからここでへたばるわけにはいかない。どうしてもお会いして、お聞きしたいことがあるのだから。そう思いながらも薄い毛布にくるまりガタガタと震えながら自分の中の葛藤が続いた。

夜中の二時頃になっていたと思う。予想も付かないことが起きた。

目の前に生きた仏像が現れたのだ。片足を立て、もう一つの足を下に降ろしている。肌は透き通るような白色。そして体のあちこちに宝石をちりばめた装飾品が輝いている。そ

して私の方を静かに見つめている。

私はそのあまりの美しさに呆然となった。何か言いたげな表情だが言葉は発しない。じつとこちらを見たままだ。

何というお方だろう。頭の中で冷静に目の前に座る方の名前を考えている自分があった。

「観音菩薩か、ターラー菩薩様かな？ それとも……」

そんな風に考えているうちにいつの間にかさっきまでの息苦しさは嘘のように消え去っていた。

ネパールのルンビニに到着したのは二〇〇九年一月二四日の午前中。面会の予定はこの日の午後に決められていた。面会の相手はもちろんチベット仏教サキャ派のトップ。サキャ・トリチェン・リンポチェ四一世。辺りは一月だというのに爽やかな風が吹き無数の鳥たちのさえずりが耳に心地良い。

部屋に入るとサキャ・リンポチエは部屋の中央に座っておられた。

「日本から来たのだね」とリンポチエは手を差し出しながら言われたので、私はそのままその柔らかな手を握り返した。

師が以前に京都や奈良を旅された事が話題に上り、面会の場は初対面とは思えないくらいなごやかな雰囲気につつまれた。存命中にカトマンズでチヨガエ・リンポチエにお会いした折のツーショット写真をスマートフォンに入れておいたのでお見せすると「ヴェリーフォーチュン」と微笑んでくださった。

予定されていた面談時間も過ぎたころ、私はそろそろあの質問をしなければならぬと感じた。

そう、サキャ・リンポチエにお会いしたらどうしてもお聞きしたいと思っていたあの質問。

「この後、私は自分を見いだすために何を勉強すればよいのでしょうか」

間髪を入れず、サキャ・リンポチエが声を発した。

「シャーンティデーヴァだ」

恥ずかしながらその時の私にとっては初めて耳にする人物であった。リンポチエは私の目を見つめて続けた。

「シャーンティデーヴァの論書がある。ボーデイサットヴァチャラーヴァターラというのだ。もし君がこの論書を勉強するなら、君自身が誰であるか知ることだろう。そしてそれは君の妻も子供においてもだ」

あるとき息苦しさの最中に私の眼前に突然現れた方はその後ボーデイサットヴァつまり菩薩であると知った。そしてサキャ・リンポチエが口にされたボーデイサットヴァチャラーヴァターラ。それは菩薩行に入るという意味。この菩薩という言葉の暗号には、その後の私を方向づける力があつた。

そしてちょうど二年後の今、ここに『菩薩を生きる』と題して英訳からの邦訳が実現した。

千三百年以上前のシャーンティデーヴァの言葉の一つ一つは今の時代にもなお重要な意味を持つ。大乘仏教の教典ではあるが、読むにあたってはむしろ古代の詩や文学作品に接するかのよな態度でも良いのではないかと私は思う。偶然開いたページの一行に大切なメッセージを見つけるかもしれないし、あるいはじっくり読み込んで菩薩行の本質を体得するのも良いだろう。いずれにしてもシャーンティデーヴァの神聖な論書は読者の心の変容に大きく貢献するに違いない。

長澤廣青

目次

プロローグ	2
第一章 菩提心の恩恵	11
第二章 供養と帰依	25
第三章 菩提心の理解	49
第四章 菩提心の堅持	63
第五章 正知の守護	81
第六章 忍辱	119
第七章 精進	165
第八章 禪定	193
第九章 智慧	257
第一〇章 廻向	315
付録一 シャーンティデーヴァの生涯	337
付録二 自他の平等	349
付録三 自他の交換	361
注	370
エピソード	396
訳者あとがき	399

Bodhisattvacarya¹vata²ra

第一章 菩提心の恩恵

第一章 菩提心の恩恵

すべての仏陀と菩薩に捧げる

- 一、善逝⁽¹⁾に、その法身⁽²⁾に、その後継者⁽³⁾に、
崇拜に値するすべての方々に、礼拝⁽⁴⁾する。
經典に従い、菩薩行の実践について、
簡潔に述べるとしよう。

- 二、いまだ説かれていないことは、ここでは語らず、
私は詩作のすべを知らない。
ゆえに、これが他者に役立つとは思わない。
ただ私の心の修行のために、書くにすぎない。

- 三、よって、私の信心はしばし強まり、
この徳のある道にも慣れ親しむだろう。
今、私の言葉を耳にしている者にも、
私と同じ利益⁽⁵⁾があらんことを。

- 四、この恵まれた境遇に達するのは実に難しい⁽⁴⁾。
この境遇にあれば人間であることの意義が得られる。
この機会をうまく役立てなければ、
二度と機会は訪れないかもしれない。

- 五、雲に覆われた闇夜を、
ふいに稲光が走り、すべてをくつきりと照らし出す。
同じように、仏陀の力でこくまれに、
徳の高い考えが、つかの間ながらこの世に生じる。

六、すなわち、徳とは弱いもので、

悪は常に、大きく圧倒的な力を持つ。

完全な菩提心の他に、

どんな徳が悪を打ちのめすというのか。

七、いく劫ごうにもわたり深く考え、

完全な菩提心こそが、限りなく多くの者を、

楽々と至高の喜びに導くと、偉大な聖者たちは理解した。⁽⁵⁾

八、衆生のあまたの苦悩を打ち砕きたい、

衆生の苦しみを癒したい、

無数の喜びを味わいたい、

そう願う者は、決して菩提心を捨ててはならない。

九、輪廻の獄舎につながれて苦しむ者に、

菩提心が生じれば、

たちまち仏子と呼ばれ、

世界からも、神々からも人間からも、敬われる。

一〇、錬金術師が究極の物質を作り出すように、

穢れた人の身体を、

無限の価値を持つ宝である仏陀の身体にする。

それが菩提心。しっかりとつかまえよ。

一一、唯一衆生を導く無限の智慧ちえであり、

つぶさに探求され、無限の価値が認められるとなれば、

輪廻の世界を離れたいと願う者は、

この尊い菩提心を存分に保つべし。

- 一一二、他の徳は、いずれも芭蕉樹のように、
実を結ぶと力を使い果たす。
すばらしい菩提心の木だけが、
次々と実を結び、どこまでも成長する。
- 一一三、英雄に守られて危機を通り抜けるように、
恐ろしい罪に苦しむ者も、
菩提心があれば、たちまち苦しみから解放される。
おのれの罪に怯える者は、菩提心に頼るがよい。
- 一一四、火がこの世を破壊するように、
菩提心は、重い罪をたちどころにしかと突き崩す。
菩提心の恩恵はかくも際限がない。
弥勒⁽⁶⁾は善財童子にそう説かれた。
- 一一五、菩提心とは目覚めた心、
それには主に二つの面があるとされる。
一つは志の菩提心、すなわち発願心^{ほつがんしん}、
もう一つは行動の菩提心、すなわち発趣心^{ほつしゆしん}。
- 一一六、その二つは、たとえるならば、
行きたいと思うことと、出かけること。
賢明な者は、この二つの菩提心の
違いを理解すべし。
- 一一七、発願心を持てば
輪廻をさまよう者にすばらしい結果が生じる。
されど発願心は、発趣心のごとく、
際限なく徳を生じはしない。